

看護専門職者の男性と女性におけるアンドロジニーな生き方の構造

石原 留美

(四国大学)

松村 恵子

(香川県立保健医療大学大学院)

【要旨】

本研究では、一人の人間が男らしさと女らしさの両方を兼ね備え、その人らしくしなやかに生きるアンドロジニーの概念に着目し、看護専門職者の男性と女性における実態分析からアンドロジニーな生き方の構造を明らかにすることを目的とした。その結果、男性では表面上、自己実現的なアンドロジニーの《課題達成志向》の行動をしているが、根本的には《性役割志向》に価値をおいた生き方をしている。女性では、《性役割に対する抵抗志向》をもち、《自分らしさ志向》で《役割使い分け志向》を取り入れたアンドロジニー的な柔軟な生き方をしているが、他者には《性役割期待志向》をもっている。そのため男性・女性としての自らの在り方、そして看護専門職を選択した人間としての生き方についても視野に入れ、多様性、個別性のあるライフキャリア支援や教育的機会が生涯を通じて重要と示唆された。

1. 緒言

少子高齢社会、医療技術の高度化などにより看護師の需要はますます高まり、2010 年末現在の就業者数は約 95 万 3 千人と年々増加している。そのうちの 5.6%は男性看護師で約 5 万 3 千人が就業している¹⁾。2 年前の調査から増加率を見てみると男性 19.9%、女性 8.1%と特に男性看護師の躍進は際立っている。

複雑化している現代社会において多様な価値観を持つ人たちの生命を育み、支え、慈しむうえで男性看護師と女性看護師が共に存在し、援助を幅広く選択できる環境づくりは必要不可欠である。しかし現状においては、暴力や攻撃性は男性看護師、女性のケアは女性看護師と社会的性役割によりお互いの専門性を取り決め、固定化しようとしており、そのことが看護専門職としての自律性や専門性を低下させているということを強く認識しなければならない。

そのため、看護専門職者自身が社会的性役割にこだわらない豊かな選択肢を持ち、その人らしく一人の人間としてしなやかに生きていくことが重要である。看護基礎教育は勿論のこと、継続教育においても生涯を通じて、社会的な性役割に対する思い込みを認識し直す教育的機会を設け、性差を超越した専門性と看護実践能力を育む必要性がある。

性役割に関する発達研究を行ってきた Bem²⁾ は、社会が期待する男性像や女性像にとらわれるのではなく、両者のパーソナリティ特性を兼ね備えた〈心理的両性具有性 (psychological androgyny)〉が望ましい人間像であり、心理的健康や社会的適応力を高めると考えた。また福本³⁾ はアンドロジニー (androgyny) な生き方について、男らしさ・

女らしさという性にまつわる観念は勿論のこと、それに留まらず無意識のうちに抱いている様々な先入観・価値観などから解き放たれて〈一個の人間として、その人らしく自由に生きること〉であると述べている

看護専門職者の男性と女性がアンドロジニーな生き方をするということは、自分らしさを自由に表現できる主体として、自己の法則にしたがって自律的に生きていくことである。そして看護専門職者の男性と女性としての生き方に柔軟性や多様性をもたらし、個人のもつ可能性を最大限に表現できる自己実現に向かって生きていくことを意味する。このことは、看護専門職者の男性と女性の調和と発展的な関係性を構築し、相互交渉による相互浸透行為によりお互いに専門性を深め、看護の対象者の生活において、個々のニーズに満たされた健康と自立を支援していくことにつながると考える。

2. 目的

本研究では、一人の人間が男らしさと女らしさの両方を兼ね備え、その人らしく、しなやかに生きるというアンドロジニーの概念に着目し、看護専門職者の男性と女性における実態分析からアンドロジニーな生き方の構造を明らかにすることを目的とした。

3. 用語の定義

Platon⁴⁾の「饗宴」では太古の昔、現在とは異なり男性と女性の両性を等しく備えたアンドロギュノス(androgyne)が存在していた。そして神々により身体を2つに切断され、そこから人間としては半身であり、不完全な状態である男性と女性という新たな人間ができあがったとされている。

そこで本研究においてアンドロジニーとは、社会的性役割にこだわらない豊かな選択肢を持ち、その人らしく一人の人間としてしなやかに生きていく人間像とする。

4. 方法

①調査対象：2008年12月現在、全国自治体病院協議会に所属する都道府県立、政令指定都市立、市立の病院で総病床数が100床以上、精神病床数が10床以上の全ての条件を満たし、看護部門の責任者から研究協力の同意が得られた36の病院に勤務する804名の看護専門職者で、内訳は男性402名、女性402名とした。

②調査期間：2008年12月から2009年2月とした。

③測定用具：本研究の目的は看護専門職者の男性と女性における実態分析からアンドロジニーな生き方の構造を明らかにすることであり、信頼性・妥当性が確認されている福本⁵⁾の「アンドロジニーな生き方尺度」を用いた。性役割現実像の10項目と性役割期待像の6項目から成り立っている。各項目に対する評定は1＝全くあてはまらない2＝あまりあてはまらない3＝どちらでもない4＝かなりあてはまる5＝非常にあてはまる、の5段階とした。

④データの収集方法：事前に看護部門の責任者あてに依頼文を郵送し、調査協力を得られる場合、男女同等数の参加者をお願いした。協力を得られた病院に参加者人数分の依頼文、調査票、返信用切手を貼り送付先を記述した封筒を郵送した。回収は参加者自身による返信用封筒の投函を依頼した。

⑤分析方法：IBM SPSS Statistics 18.0 を用いた記述統計、因子分析（プロマックス回転）、信頼性分析（クロンバックの α 係数）を行った。

5. 倫理的配慮

測定用具について先行研究者に文書で説明し、使用の承諾を得た。研究協力者には目的と方法、研究結果の公表を説明した研究依頼書と調査票を個別に配付した。回答は無記名とし、自由投函により同意を得られたとした。データは鍵つき書庫で管理し、終了後はシュレッターによる廃棄で個人情報保護に努めた。

6. 結果

①回収率：回収された調査票は 600 名で回収率は 74.6%であった。その内訳は、男性 275 名で 68.4%、女性 325 名で 80.8%であった。

②対象者の背景：平均年齢は、男性は 37.9 歳で、女性は 39.5 歳であった。看護師としての勤務年数は、男性は平均 13.6 年で、女性は 16.8 年であった。現在所属している部署の診療科については、男性で一番多いのは精神科 193 名 (70.2%)、二番目に多いのは外科系と救急、手術室、ICU でそれぞれ 26 名 (9.5%) であった。女性で一番多いのは精神科 177 名 (54.5%)、二番目に多いのは外科系 51 名 (15.7%) であった。看護師として異性と共に業務をした経験のある男性は 275 名 (100%) であった。その関係性は 170 名 (61.8%) が<評定段階：満足している(していた)>ない<評定段階：まあ満足している(していた)>であった。そして 87 名 (31.6%) が<評定段階：どちらでもない>、18 名 (6.6%) が<評定段階：あまり満足していない(していなかった)>ない<評定段階：満足していない(していなかった)>であった。女性では 319 名 (98.2%) であった。その関係性は 236 名 (72.6%) が<評定段階：満足している(していた)>ない<評定段階：まあ満足している(していた)>であった。そして 63 名 (19.4%) が<評定段階：どちらでもない>、19 名 (5.8%) が<評定段階：あまり満足していない(していなかった)>ない<評定段階：満足していない(していなかった)>であった。

③主要変数の記述統計：看護専門職者の男性のアンドロジニアな生き方に関する結果は表 1 に示したように、肯定の度合いが最も高いのは『16. 自分は育児・家事も仕事もうまくしたいと思う』で 3.945<評定段階：ややあてはまる>であった。続いて『14. 自分は状況に合わせて強く主張することも人に従うこともできるようになりたい』で 3.832<評定段階：ややあてはまる>であった。

看護専門職者の女性のアンドロジニアな生き方に関する結果は表 2 に示したように、肯定の度合いが最も高いのは『14. 自分は状況に合わせて強く主張することも人に従うこともできるようになりたい』で 4.065<評定段階：ややあてはまる>であった。続いて『16. 自分は育児・家事も仕事もうまくしたいと思う』で 4.031<評定段階：ややあてはまる>であった。

④因子分析と信頼性分析：看護専門職者の男性の因子分析の結果、固有値 1.00 以上は 6 因子抽出され、累積寄与率は 72.11%であった。因子のスクリープロットは 5.21-2.32-1.71-1.25 と急な勾配であり、分数の説明率は 29.35-13.05-9.63-7.04 であった。また本研究の累積寄与率は、50%前後を基準に解釈しており、2 因子を抽出し、表 1 に示した。

表1. 看護専門職者の男性のアンドロジニーな生き方に関する因子構造

n=275

項目	(16項目の α 係数=0.737)	因子構造		共通性	平均値	標準 偏差
		I	II			
《 課題達成志向 》						
11	日常生活において、性別にとらわれず行動したいと思っている	0.707	-0.060	0.525	3.596	1.101
13	自分は性別にとらわれず一人の人間として生活したいと思っている	0.707	0.020	0.493	3.593	1.095
16	自分は育児・家事も仕事もうまくしたいと思う	0.686	0.096	0.447	3.945	0.982
15	自分に子どもがいたら、父親の役割も母親の役割もしたいと思う	0.678	0.065	0.441	3.648	1.102
14	自分は状況に合わせて強く主張、人に従うこともできるようになりたい	0.652	0.152	0.397	3.832	0.928
9	自分に子どもがいたら、父母親の役割も場合によっては、できると思う	0.575	0.053	0.318	3.337	1.055
12	自分は男らしい部分と、女らしい部分の両方を併せもっていたい	0.559	-0.075	0.340	3.059	1.116
10	自分は育児・家事も仕事もうまくできるタイプだと思う	0.514	-0.029	0.273	3.040	1.055
5	自分は性別にとらわれず一人の人間として生活していると思う	0.507	-0.186	0.341	3.245	1.135
8	自分は状況に合わせて、強く主張することにも人に従うこともできる	0.363	0.043	0.126	3.557	0.877
4	自分は男らしい部分と、女らしい部分の両方を併せ持っている	0.322	-0.099	0.130	3.044	1.014
《 性役割志向 》						
7	女性っぽい行動をしている男性に違和感を覚える	0.079	0.695	0.461	3.228	1.222
6	男性っぽい行動をしている女性に違和感を覚える	0.082	0.678	0.438	2.652	1.144
2	“女性向け”と思われている役割・仕事をすることに抵抗がある	-0.169	0.392	0.216	2.721	1.037
1	日常生活において、性別にとらわれず行動する方である	0.294	-0.354	0.265	3.397	1.009
3	“男性向け”と思われている役割・仕事をすることに抵抗がある	0.046	0.155	0.022	2.070	0.919
固有値		5.21	2.32			
寄与率		29.35	13.05			
累積寄与率		29.35	42.40			

16項目におけるクロンバックの α 係数は0.737であった。

因子Ⅰは『11. 日常生活において、性別にとらわれず行動したいと思っている』、『13. 自分は男性、女性という性別にとらわれず一人の人間として生活したいと思っている』など11項目で、全体に全てを完全に成し遂げようとする構成になっており、与えられた課題に真摯に取り組む姿勢がみられることから《課題達成志向》と解釈した。

因子Ⅱは『7. 女性っぽい行動をしている男性に違和感を感じる』、『6. 男性っぽい行動をしている女性に違和感を感じる』など4項目で、全体に性役割に対するこだわりから構成されており、自分自身と他者に対する性役割期待がみられており《性役割志向》と解釈した。

表2. 看護専門職者の女性のアンドロジニーな生き方に関する因子構造

n=325

項目 (16項目の α 係数=0.749)		因子構造				共通性	平均値	標準偏差
		I	II	III	IV			
《 自分らしさ志向 》								
13	自分は性別にとらわれず一人の人間として生活したいと思っている	0.768	-0.013	0.037	0.022	0.562	3.867	0.921
12	自分は男らしい部分と、女らしい部分の両方を併せもっていたい	0.727	0.019	-0.042	0.084	0.543	3.681	0.867
11	日常生活において、性別にとらわれず行動したいと思っている	0.724	0.016	-0.011	-0.073	0.566	3.901	0.836
5	自分は性別にとらわれず一人の人間として生活していると思う	0.640	-0.067	-0.091	0.077	0.382	3.480	0.992
1	日常生活において、性別にとらわれず行動する方である	0.583	0.009	-0.125	0.054	0.383	3.700	0.870
4	自分は男らしい部分と、女らしい部分の両方を併せ持っている	0.564	-0.028	-0.004	0.091	0.291	3.576	0.865
14	自分は状況に合わせて強く主張、人に従うこともできるようになりたい	0.488	0.213	0.239	-0.176	0.466	4.065	0.779
《 役割使い分け志向 》								
9	自分に子どもがいたら、父母親の役割も場合によっては、できると思う	-0.097	0.755	-0.120	0.044	0.510	3.279	1.008
15	自分に子どもがいたら、父親の役割も母親の役割もしたいと思う	-0.031	0.754	-0.142	0.059	0.569	3.542	1.072
16	自分は育児・家事も仕事もうまくしたいと思う	0.064	0.496	0.150	-0.107	0.313	4.031	0.905
10	自分は育児・家事も仕事もうまくできるタイプだと思う	0.09	0.344	0.064	0.161	0.187	2.669	0.990
8	自分は状況に合わせて、強く主張することにも人に従うこともできる	0.214	0.244	0.121	-0.101	0.185	3.499	0.920
《 他者への性役割期待志向 》								
7	女性っぽい行動をしている男性に違和感を覚える	0.031	-0.016	0.677	0.006	0.452	2.873	1.187
6	男性っぽい行動をしている女性に違和感を覚える	-0.112	-0.034	0.660	0.100	0.511	2.313	1.057
《 自分への性役割期待に対する抵抗志向 》								
2	“女性向け”と思われている役割・仕事をすることに抵抗がある	0.185	0.020	-0.035	0.765	0.573	2.393	0.948
3	“男性向け”と思われている役割・仕事をすることに抵抗がある	-0.133	0.052	0.267	0.543	0.445	2.560	0.918
固有値		3.90	2.01	1.35	1.13			
寄与率		26.95	13.88	9.34	7.77			
累積寄与率		26.95	40.83	50.18	57.95			

看護専門職者の女性の因子分析の結果、固有値 1.00 以上は 4 因子抽出され、累積寄与率は 57.95% であった。固有値は 3.90-2.01-1.35-1.13-0.97 と減少しており、因子負荷量 0.30 以上、累積寄与率 57.95% を基準に解釈し、4 因子抽出し、表 2 に示した。16 項目におけるクロンバックの α 係数は 0.749 であった。

因子 I は『13. 自分は男性、女性という性別にとらわれず一人の人間として生活したいと思っている』、『12. 自分は男らしい部分と、女らしい部分の両方を併せもっていたい』など 7 項目で、全体に自分の価値観を大切にする構成となっており、自分自身が納得できる生き方がみられることから《自分らしさ志向》と解釈した。

因子 II は『9. 自分に子どもがいたら、父親の役割も母親の役割も場合によっては、できると思う』、『15. 自分に子どもがいたら、父親の役割も母親の役割もしたいと思う』など

4項目で、全体に仕事、育児、家事に対する柔軟性から構成されており、臨機応変さがみられることから《役割使い分け志向》と解釈した。

因子Ⅲは『7. 女性っぽい行動をしている男性に違和感を感じる』、『6. 男性っぽい行動をしている女性に違和感を感じる』の2項目で、全体に男らしさ、女らしさを望むことから構成されており、他者に対する性役割期待がみられることから《他者への性役割期待志向》と解釈した。

因子Ⅳは『2. “女性向け”と思われている役割・仕事をするに抵抗がある』、『3. “男性向け”と思われている役割・仕事をするに抵抗がある』の2項目で、全体に男らしさや女らしさという社会が期待する役割や仕事への抵抗感から構成されており、自分に性役割を期待されたくないという気持ちがみられることから《自分への性役割期待に対する抵抗志向》と解釈した。

7. 考察

本研究では、一人の人間が男らしさと女らしさの両方を兼ね備え、その人らしく、しなやかに生きるというアンドロジニーの概念に着目し、看護専門職者の男性と女性における実態分析からアンドロジニーな生き方の構造を明らかにすることを目的とした。

看護専門職者の男性において明らかになったことは、表面上は公私を問わず課題を達成し、役割を演じ、成功させようという一見、自己実現的なアンドロジニーの《課題達成志向》による行動をしているが、根本的には男性としての《性役割志向》に価値をおいた生き方をしていることが考えられる。

この生き方は、社会から自分に課せられた問題や役割として取り組んでいるおそれもあり、行き過ぎると過重になり、現実の自己と社会から期待される自己、また理想とする自己との格差から男性としてのアイデンティティを確立できなくなる可能性がある。それらは経済的責任を果たせないことによる非婚化、現実から逃避するための自殺、働き過ぎによる過労死などの社会的問題につながっている。その後も退職により職場での役職や一家の稼ぎ手としての役割を失ってしまうと、自分の居場所や生きがいを見つけることが難しく、認知症や孤独死に至るなど様々な問題を引き起こしている。

看護専門職者の男性においても管理職や看護専門職者の女性が期待する役割としては、患者不穏時の対応や体位変換、車椅子の移動時などの「力、体力」、組織や会議を活性化させるための「リーダー的存在」^{6) 7)} など、男性としての性役割を期待されている。そしてそれらの期待に対し「男性看護師として期待されることがプラスにとれない、期待がプレッシャーになる」という重圧感と同時に「周囲の期待に応えたい、職場で同じ男性看護師として比較されるベテランの男性看護師に追いつき、追い越したい」⁸⁾ という本来の自分らしさよりも、男性としての性役割期待を一生懸命果たそうとする思いが語られていた。本研究においても、看護専門職者の男性と女性の関係性について女性では「あまり満足していない」と「どちらでもない」が25.2%であったが、男性では38.2%を占めていた。このことから、看護専門職者の男性におけるジレンマが推測できる。

このような男性としての《性役割志向》による《課題達成志向》の行動のなかで看護専門職者の男性は、男らしさを発揮しなければならないという義務感をもちながら職務を全うしている。このことは当然のことながら様々な場面において方法の選択肢を狭め、看護

専門職者としての援助の質を低下させ、本来の自分らしさが表現できていないと考えられる。例えば、がんの末期患者の思いを傾聴する場面において、看護専門職者の女性では涙を流し、共感的態度で寄り添うという看護は女らしさと合致しており、自然とみなされることが多い。一方で看護専門職者の男性が看護専門職者の女性と同様に感情を表出することは、男らしくないことであると自分自身も疎み、看護の対象者からも疎まれる可能性があるということである。看護という専門職に対し、看護専門職者自身及び社会全体が男性、女性としての性役割を期待するのではなく、個人の人間性に焦点をあてた役割期待と評価が重要であると考えられる。

看護専門職者の女性において明らかになったことは、自分自身に対しては《性役割に対する抵抗志向》を持ち、社会が期待する女らしさにとらわれない《自分らしさ志向》で《役割使い分け志向》を取り入れたアンドロジニー的な柔軟な生き方をしているが、他者に対しては《性役割期待志向》の行動を望んでいるということである。

国眼は、女性である自分を自分の中にしっかりと位置づけるためには、女性に生まれたことを認め、社会や他者からの期待を自分なりに消化し、自分が納得できる女性としての自分をつくりあげていくことが必要であると述べている⁹⁾。看護専門職者の女性においても、看護師としてまた母親として、妻としてなど複数の役割をしなやかに切り替えながら、自分らしさを失うことなく遂行していると考えられる。

しかし一方で、他者に対しては《性役割期待志向》の行動を望んでいる。性別による社会的性役割が期待されている現代社会では、社会が期待する「女らしさ」、「男らしさ」と「自分らしさ」の間で役割葛藤を感じていることが推測される。上田は、自己の経験を、それが自分にとってどんなものであっても(たとえ自分にとって認めたくないもの、自尊心を傷つけかねないものであっても)、これをありのままに受け入れ、自分のものとして統合できるような理解とゆとりを持った人は、他人についても同様に、そのありのままの人間性を認め、受け入れることができるであろうと述べている¹⁰⁾。自分らしさを大切にすることと、他者のその人らしさを大切にすることは、全く別の事ではなく、自分のことを慈しみ、愛し、大切にできる人は、他者にも同様、慈しみ、愛し、大切にすることができるのである。研究者の先行研究¹¹⁾において、看護専門職者の男性と女性における関係性は、女性優位一男性劣位になっていることが明らかになっている。調和と発展的な関係性を構築し、相互交渉による相互浸透行為によりお互いに専門性を深めていくうえでは、より柔軟性を兼ね備えたアンドロジニーな生き方が手がかりになると考えられる。

以上のことから看護専門職者の男性と女性の双方において、社会的性役割にこだわらない豊かな選択肢を持ち、一人の人間としてその人らしい生き方である成熟したアンドロジニーな生き方には至っていないと考えられる。このことは、看護専門職者自身に社会的性役割に対する「あるべき思考」が働いており、多様な価値観を持つ人たちの生命を育み、支え、慈しむうえで、よりのびやかに、しなやかにケアを提供できていない可能性がある。「男性・女性の看護師としてどのように生きていくのか」ということではなく、男性・女性としての自らの在り方。そして看護専門職を選択した人間としての生き方についても視野に入れ、多様性、個別性のあるライフキャリア支援が必要である。また、看護基礎教育においては勿論のこと、院内教育、専門教育、管理者教育など継続教育においても、看護専門職者としてのアンドロジニーな生き方について学習できる教育的機会が生涯を通じて

重要であると示唆された。

8. 研究の限界と今後の課題

現在、男性看護師においては精神科に勤務している割合が高いため、研究対象を選定する要件の一つとして「精神病床数 10 床以上」を含めた。そのため、精神科勤務者が多数を占める結果となったことが本研究の限界である。今後は一般科に勤務する男性看護師、女性看護師との比較も含めていくことが課題となる。

また、今回は看護専門職者の男性と女性のアンドロジニーな生き方、すなわち行動としての構造を明らかにしてきたが、アンドロジニー得点を算出することによりパーソナリティ特性を明らかにするなど、アンドロジニーの構造をより細やかに分析する必要性がある。そしてお互いが調和と発展的な関係性を構築するために必要な相互交渉による相互浸透行為を具体的に研究していきたいと考える。

9. 結語

医療の高度化、急激な高齢化の進行、個人の価値観の多様化、少子化によるマンパワー不足などにより、現代社会に求められる看護の専門性はますます高度化している。それに伴い、看護基礎教育においても、2009 年の保健師助産師看護師法の改正で、看護師の養成教育としての「大学教育」が制度として正式に認知され、看護師の専門性の強化をめざした取り組みがされている。看護系大学の増加とともに修士課程、博士課程も全国的に増加し、看護師教育はますます専門化、高度化している。

その一方で、日本には職業訓練を主とした養成所や高等学校教育、また中学校卒業で入学可能な准看護師養成所が数多く存在しており、いわゆる専門職とされる職種のなかでこれほど幅広い教育機関が残っているものは他にはない。

このような現況にある看護専門職が、社会の期待に応えていく力をつけるためには、相当の自助努力が必要である。上にのぼりつめていくだけではなく、土台となる部分をしっかりと固め、相互交渉による相互浸透行為によりお互いに専門性を深めていかなければならない。その専門性は単に技術力ではなく、それを支える人間性とともに育むことが重要である。その中心概念となるが、アンドロジニーである。

生涯にわたる人間的成熟を実現するためには、一人の人間が男らしさと女らしさの両方を兼ね備えその人らしく、しなやかに生きるアンドロジニーな生き方が大切と考える。

本論文は、香川県立保健医療大学大学院保健医療学研究科看護学分野における修士論文の一部を加筆・修正したものである。

【注記・引用文献】

1) 厚生労働省 平成 22 年衛生行政報告例「就業医療関係者結果の概況」

(www.mhlw.go.jp/、2012 年 2 月 20 日参照)

- 2) Sandra Lipsitz Bem, "THE MEASUREMENT OF PSYCHOLOGICAL ANDROGYNY." in
 Bulletin of *JOURNAL OF CONSULTING AND CLINICAL PSYCHOLOGY*. 42, 1974, pp. 155
 -162
- 3) 福本俊「Androgyny な生き方尺度の提案」(『日本家政学会誌』59(10)、2008)pp. 805
 -811
- 4) プラトーン著、森進一訳『饗宴』新潮社、1993、pp. 46-59
- 5) 前掲書 3)
- 6) 貝沼純、斎藤美代、佐藤尚子、穴戸朋子、林正幸「女性看護師が男性看護師に期待する職務・役割に関する調査研究」(『福島県立医科大学看護学部紀要』10、2008)
 pp. 23-30
- 7) 袴田将嗣、岩田浩子「一般病棟における男性看護師の役割に対する管理者の意識の検討」(『第34回日本看護学会集録(看護管理)』2003) pp. 408-410
- 8) 坪之内建治、有田広美「男性看護師が感じる困難とそれらの困難を経験して成長する過程」(『第39回日本看護学会集録(看護管理)』2008) pp. 309-311
- 9) 国眼眞理子(岡本祐子、松下美知子編)『女性らしさと自分らしさの間で—青年期、"新女性のためのライフサイクル心理学"』福村出版、2002、pp. 87
- 10) 上田吉一『自己実現の心理 新装版』誠信書房、1981、pp. 174
- 11) 石原留美、松村恵子「性役割パーソナリティ特性からみた看護専門職者の男性と女性の関係性の特徴—一般男性・女性との自己比較からの分析—」(『香川母性衛生学会誌』2011) pp. 33-44